

批評及び紹介

スタイン氏古代の和闐(其三)

第四編 和闐の屬領

第一節 ダンダーン・ウイ

リクの古址

スタイン氏は和闐より沙漠を越て東に進み更に東

北に向ふこと十日にして土俗にダンダーン・ウイリク(Dandan-Uilik)と稱する地に達せり。スタイン氏は此地に史料を得んことを豫想し、直に發掘に従事せしが、先づ寺院の舊址を發掘せり、固より寺院の本形を存することなきも、或は内壁面に佛菩薩を彫刻し、或は外壁面に佛敎に關する史實佛像を浮彫となし、中には着色の施し今尙ほ明瞭なる美彩を遺せり、又梵書體(Brahmi)にて東イラン系の俗語を刻

したるものを見る。第二の寺院には小房に浮彫を施し、寺内に毗沙門天の石彫像を得たり、毗沙門天は北方を守護する印度の天王にして、この外に持國天・增長天・廣目天の三天と共に四天王と稱せられ佛法護衛の任に當るを以て、毗沙門天の外に尙ほ三天王あるべき筈なるが、三天の石像は散失して發見せざれども、三方に臺石の跡あれば、本と四天王ありしこと想像するに足るべし。

スタインは大に力を得て更に貴族の邸宅を發掘したるが、幸にして重要なる佛典の寫本竝に古文書を發見したり、即ち

一、笈多朝時代の梵書體にて書ける寫本、但梵語に非る言語、

二、般若經第十八品の一部、第七八世紀笈多朝時代の書風、但寫本、

三、イラン語の古文書、

四、金剛般若經の一部、第七八世紀笈多朝時代の

書風、但寫本、

にして、造形美術品にては、

一、畫像、于闐地方の婦人等を波斯式の風裝に畫けるもの、

二、金剛手・文珠・彌勒の石像、

ありて、何れも古代の状態を現はせる作品なり。ス

タイン氏は進んで別に二三の故址を發掘したる際、

唐の徳宗建中二年（西曆七八一）竝に同帝貞元六年

（西曆七九〇）の年號ある漢文の公文書を得たるが、

文書の中には于闐・白玉・黒玉・等の六城の名稱を記

載せしものあり。其外に梵書體にてガルチャ族の土

語に似たる言語を記述せし古文書あり。

第二節 護國寺の發掘物

スタインは又別に一寺院を發掘したるが、刻文に

批評及び紹介

よりに本と護國寺と稱する寺院なるを知り、寺内の舊地・僧房等より有力なる史料を得たり、

一、古文書——梵書體、東イラン語

二、公文書——記録、唐代宗建中三年の年號あり、

三、騎馬の像、駱駝に乗れる像——共に畫像、

四、佛像——佛陀・觀音等の石像、畫像、

この中にも佛菩薩の像に健馱羅式の美術品ありて、

其數少からず、又波斯風のものも見ゆるが故に、健

馱羅美術の思想が于闐に入りしを知ると同時に、ア

フガンの北部、古のバクトリヤ地方に行はれし波斯

風的美術思想も于闐に來りて佛像を寫すに至れるこ

とを明にし、之に由りて于闐の領内に支那・印度・波

斯の文化が交叉して光彩を放ちし古を想はしむるも

のあり。

第三節 妮摩城

スタイン氏は『西域記』の妮摩城がマルコ・ポロ

第二卷 (四三三)

の Pain に同じさを思ひ、指定の距離其他の研究によりて、今の Uzun-tah なりと断定したり、娑摩城は古の扞彌國の中心にして、扞彌國は今の Chira と Korja との間に散在する沙漠島全部を包括したり。

第四節 クリヤ及びニヤ

方面の古址

スタインは ダンダーン・ウイリク より東に進みて クリヤ 方面に向へり、途に ラワク (Rawak) に於て佛塔並に爾餘の古址を發掘して、意外に壯大なる瓦造

の大佛塔が建立せられしを知り、又有力なる一古文書を發見したり、全體波斯語の語形を有しベブライ文字を以て之を寫せし公文書なり、是れは文化史上の重要な發見にして、之に由りて于闐の領内にベブライ文書を寫し得る者が居住せしを明にし、波斯・シリヤ方面の學者が遠く于闐の領域に留りし史實を立證するに足れり。

スタイン氏は クリヤ 地方に赴きて探險を行ひ、更に ニヤ (Nia) に至れり、于闐屬領の東境に位する『西域記』の尼攘城の位置に就きて三四の異説あれども、スタイン氏は今の ニヤ を以て之に當て、聲音上の證明並に玄奘の指定に係る距離の考證をなせり。

スタイン氏は又 ニヤ 以東の諸地に往きて邸第の古址を發掘して古の建築が宏壯にして林園を有する境内あるもの少からざるを示し、又日用家具及び文房具をも發掘して漢史の記事を立證する等至れり盡せりといふべし。

上來三回に亘りて于闐の本國及び屬領に於ける スタイン 氏探險の要領を盡せり、然るに スタイン 氏の書は近時の大著にして西域諸國記述の範圍甚だ廣く、詳細に之を解説する時は終に一巻の書をなすに足るを以て、今于闐直屬の地方に關する部分の解説を結了せしを以て本稿の終末となす。(完)